# 子ども社会学の立場から

○元森絵里子（明治学院大学）

## 1. 本報告の目的

本報告では、第一に、家族観の歴史化と個人化という〈家族の多様化〉をめぐる家族社会学の議論を報告者なりに整理する。第二に、子ども研究における近代的子ども観の問い直しの試みの隘路に関する報告者の整理を紹介する。それらを通して、「子どもの権利」「最善の利益」のようなかけ声で思考停止せずに、現実を記述し、実践と接続していくための社会学的視角について、問題提起を行う。

## 2. 近代家族論・家族の個人化論と「子ども」という主題

核家族を社会の普遍的な基礎と見るような家族像が、「近代家族」という歴史的な表象を規範化する営為だったと反省されるようになって久しい。親密性の変容（ギデンズ）のなかで、そもそも家族をつくるかどうかやどのような形の家族をつくるかという点で、標準的家族（近代家族）の形成にとらわれない生き方（個人化）が、生きやすい社会の実現といった点も含めて、しばしば肯定的に語られてきた。

しかし、本シンポジウムの問題提起にあるように、家族の多様化を全面的に肯定できないときがある。一つは、家族成員間の選好が一致しない場合であり、もう一つは、非標準的家族が社会的排除の問題につながりかねない場合である。そして、これらの問題が際立って複雑化するのが、「子ども」（「親」に対する「子ども」ではなく、法的・社会的にケアが必要とされる人々）が関わるときである。問題は親間の選好の対立に留まらなくなり、国家を含む家族外のアクターも巻き込むことになるうえ、「子ども」の生物学的・社会的未熟さが、家族の相対化に歯止めをかけ、「最善の利益」や「権利」を誰がどうやって同定するのかという問題を引き起こすからである。

## 3. 近代的子ども観の反省をめぐる子ども研究の隘路

子ども研究においても、1980 年前後に、学校化へ社会の批判意識やアリエスのインパクトと交錯しつつ、子ども観の近代性・相対性を指摘し、新たな子どもへの視角を提案する研究潮流が生じている。「児童文化から子ども文化へ」「教育学から子ども学へ」といったかたちで、大人中心で教育的で子どもを受動的な存在と見る子ども理解に、子ども中心で非教育的で能動的な子ども理解が対置された。文化人類学や社会史において、現代日本を問い直す意図も含んで、非近代的な子ども・子育ての姿が探求された。ここに、社会学的な統計調査で子どもの変化を実証しようとする動きや、乳幼児死亡率の極小化を達成して社会心理的要因へ関心を向け始めた小児科学が加わり、認知心理学や進化生物学を巻き込みながら学際的研究の機運が醸成されていった。

この機運には、規範志向と実証志向、構築論と本質論など、矛盾する視角が混在している。近代化の反省期という時代状況が、近現代に批判すべき抑圧や変容を見て非近代に新たな可能性を見るという形で矛盾を調停していた。しかし、新たな視角も近代的子ども観の繰り返しにすぎないと見ることも可能である。構築論を再構築し、「抑圧／尊重」「近代／非近代」といった二項対立図式を超えた記述と実践のための視角を打ち立てる必要がある。

## 4. 展望

欧米の子ども社会学では、1990 年代の「新しい子ども社会学」なる潮流を経て、ANT や統治性論を視角に取り入れつつ、生物学的側面も含めて子ども期・子ども観を一元論的・関係論的に把握し、「子ども」やそのエイジェンシーがいかに現れるかを記述するという提案がなされてきている。家族と子ども、児童福祉や子どもの権利条約における子ども観の転換のなかで、「最善の利益」や「アドボカシー」といった概念や実践の技法が練り上げられ、新しいメディアが新たな親子関係を現出している。これらがいかなる連関で、「子ども」と「家族」がどのように立ち上がるのか、エスノグラフィーや系譜学的な見地からの記述を積み重ねていけないだろうか。

キーワード：子ども社会学、子どもの権利、系譜学